

和語動詞カルタ

以下の本では、JSL の子どもたちの和語動詞の産出能力を調査しました。子どもたちが苦手とする語で、インプットやアウトプットの頻度が関係すると考えられる語については、教室活動で補うこともできると書きました。本書のもととなっている論文（西川・青木・細野・樋口，2015；西川・細野・青木，2016）の共著者でもある、細野尚子さんによる小学校の国際教室での実践をご紹介します。



同書 p.152 より抜粋（下線は追加）

まず、第6章と第7章のアイテム別の正答率や誤答に関する分析が明らかにしたことは、JSL の子どもが苦手とする語には、場面と頻度や母語の影響が関係するという点である。場面と頻度が関係するというのは、つまり、家庭では母語を用い、学校では日本語を用いて生活している JSL の子どもにとって、家庭場面で主に用いられる語や表現については、日本語でのインプット・アウトプットの機会（頻度）が少ないため、苦手であるということになる。また、母語の影響があるため、適切な日本語の動詞を選択できないこともある。具体例をあげると、「(服を) ぬぐ」「(靴を) ぬぐ」のように Mono の子どもが就学前に家庭で身につける語は、JSL の子どもは家庭で日本語のインプットが（十分に）与えられている訳ではないので、「(服を) とる」「(靴を) とる」のように母語の影響が出やすいということになる。しかし、インプット・アウトプットの機会が少ないのであれば、教室活動で（ある程度は）補うことが可能である。活動の内容については、子どもの年齢によっても変わってくるが、例えば、着せ替え遊びをしながら着脱動詞を使ってみたり、JSL の子どもが苦手とする動詞を含んだカルタで遊んだり、ワークシートで学んだり、様々な方法が考えられる。語彙は、成人モノリンガルであっても一生学び続けるものであるため、全ての語を教えようとする必要はない。同じ事柄を表す語であっても、母語と日本語ではその意味範囲にずれがあることや、同じ語が複数の意味で用いられることなどに気づくことができれば、その後は、子どもは自分の力で学んでいくこともできるはずである。



カードゲームが好きな子どもたちのために、国際教室には、様々なかるたが揃っています。市販のかるたの中にも、日本語学習に役立つようなものは色々あるのですが、そこは論文の著者でもある細野先生、「JSL の子どもたちが苦手としそうな和語動詞」のカルタを自作しました。机に座ってプリントでくり返し練習・・・という学習スタイルももちろん良いのですが、「足りないインプットを補う」という点では、このように遊びの中に和語動詞をたくさん取り入れて、子どもたちがくり返し遊ぶというのはとても大切なことだと思います。そして、遊んだ後に取り組めるように、定着用のプリントも作成したそうです。同じ「きる」「かける」などという動詞に、様々な意味があること、「めがね」は「きる」ものではなく「かける」ものだという点も、まさしく上の本で書いたことを実践した好例だと思います。

